

# 「一年の歳月から」

図書閲覧課 矢谷 和信

「学生がより学びやすく有意義な生活をおくり、教授がたが弁壇をふるいやすく実りのある研究生生活をおくれる、そのような環境をつくりあげていくお手伝いが、私たちの責務であると思っています。そしてこのような日常の仕事の積み重ねから、学園の発展に寄与できれば事務職員の役割が少しでも果たせるのではないかとと思っています。」

少し恥ずかしいですが、これは私が近畿大学に奉職するときの新人研修で提出した抱負です。それらしいことを書いていますが、このことは私が今勤めている部署に直接かわりのあることです。

図書閲覧課は名のごとく、本館三・四階の図書閲覧室にあります。ここには毎日、学生や教職員が利用に来られます。大学図書館というのは、大学の中核の知的情報機関であり、利用者のニーズにあった情報を提供するのが目的です。情報にはさまざまな形態があり、またこれは時代とともに変化していくものです。私たち図書館職員は、その情報を利用者にアクセスできる環境を提供してこそ、「教育」や「研究」への使命がはじめて果たせるのです。そういう意味では、今の私の仕事は先の抱負そのもので、大変やりがいを感じると同時に責任も感じます。

日常の仕事のひとつにカウンター業務があります。この業務には書籍の貸出のほか、利用者からのレファレンス（いわゆる、求めている情報をさがすお手伝い）も含まれます。そのなかでひとつ、私にとって忘れられないことがありました。昨年の暮れ、通信教育部で勉強されている50歳ぐらいのかたが図書館に来られました。そのかたは「請負契約」に

関する書籍をさがされており、カウンターへ尋ねに来られました。私なりの知識をもっての応対でしたが、何冊かの書籍をさがしだすことができ、貸出をしました。年が明けてのある日、そのかたが書籍の返却に来られました。そのときに、お世話になったとお菓子をお持ちになられたのです。お菓子がうれしかったわけではないのですが、胸がいっぱいになりました。仕事としてあたりまえのことをしているだけなのですが、こんなにも喜んでもらったことがとてもうれしかったのです。

利用者側の視点からたって環境を整備していくことは、図書館の改善につながっていきます。私の教訓のなかには、「相手の立場にたって物事を考える」や「人の心の痛みを理解する」というのがあります。心がけだけではなかなかできないことですが、どちらもこの仕事には必要なことなので、いつまでも忘れずにいたいと思っています。

